

ニュービジネス最前線——日本の起業家たち

遺伝子検診で治療から予防へ 納得感ある医療サービスを提供

クリニックMIRAI・インニューオータニ

今の医療に新風吹き込む試み

「三時間待ち三分診療」、
「医療事故」、モンスター
ペイシエント（患者）など、
様々なミスマッチや不具合
を抱える現代医療の最前線。

システム（ヒト（医師）、
モノ（設備、技術）、カネ（医
療費、病院経営））の制度
疲労を改善していくには、
素人目に見ても、すでに限
界が見えており、議論の段
階を超え、その厳しい現実
を乗り越えるべく行動（変

革）が必要であることは多
言を要しない。
医療サイドの自助努力
で、従来の医療で納得感や
満足度が損なわれている領
域や試みを一歩ずつでも改
善しようという「行動」が
なければ、医療サービスの



がん化モデル図 (提供: 柳メディファクト)

めている。
「遺伝子検診」を手掛け
る「クリニックMIRAI・
インニューオータニ」。
病気の治療に軸足を置い
ていた従来型の医療より
も、予防を重視し、遺伝
子検査によって病気のリ
スクを知り、健康を保持し
ていくという取り組みだ。
「遺伝子検査」というと
何とも敷居が高い印象を受
けるが、そんなことはない。
一般の健康診断でもお馴
染みの「採血」だけで、約
五週間で結果が出るという
手軽なものだ。
同クリニックで実施して
いるのが「がん遺伝子検査」。
体の十六部位（頭頸部、脳
腫瘍、肺、甲状腺、肝臓、
乳房、すい臓、白血病、大
腸、胃、膀胱、腎臓、前立
腺、卵巣、皮膚、子宮）の
がん関連遺伝子を解析。が
んの発症リスクを評価する
もの。

がんという病は、細胞中
のがん遺伝子の発現やがん
抑制遺伝子の変異（傷がつ
く）が、契機となる。
遺伝子の変異は、多くの
場合、後天的な要因（生活
習慣の乱れや加齢など）に
よるものだが、この変異自
体を、自己免疫で排除でき
れば、腫瘍化（がん化）、
までには至らない。
だが、画像診断などで見
つかれる腫瘍（現在では、検
査機器の進歩で最小で5m
m程度のがんを診断できる
といわれている）は、この
遺伝子の変異から約五〜二
十年をかけて、成長した
もので、こうなると、最小
サイズの腫瘍でも、一般的
ながん治療（手術、抗がん
剤、放射線）の必要性が出
てくると言われる。
早期発見、早期治療とい
うスローガンが、がん治療
では有名だ。が、同クリニ
ックでは、早期治療よりも
さらに前の段階、最新の画
像診断技術でも検出できな

い微細ながん細胞の存在、
あるいは前がん段階の「が
んリスク」（遺伝子の変異）
を、遺伝子検査で解析する
「がん超早期リスク評価」
を手掛ける。
一般的にがん家系などと
言って、がんになりやすい
家系、いわゆる遺伝による
がんリスクが唱えられるこ
とがあるが「遺伝性の腫瘍
というのは、あらゆるがん
の中で五〜一〇％程度。ゼ
ロではありませんが、当ク
リニックが提供するものは、
先天的ながんリスクよりも
はるかに多い後天的ながん
リスクを検査で示しする
ものです」と話すのは、同
クリニック・武井佳子院長。
「人間ドックなどの画像
診断で腫瘍がなくても、次
の年には腫瘍が認められ
た、という話は割りと耳に
しますよね。画像診断では、
一定程度の大きさに腫瘍が
成長していなければ、視認
できませんが、画像診断で



治療から予防に軸を移した医療「サービス」の普及が望まれる（写真はイメージ）

を目的に、先天的リスクの評価を対象に行われているケースは少なくない。

一方、同クリニックの遺伝子検査は、体質判断ではなく、疾病リスクの有無と、一歩も二歩も踏み込んだ検査。繰り返しになるが、生活習慣などによる後天的要因によるがんリスクの有無、そして、後天的要因によるものであれば、生活習慣の見直しなどによって、リスクを軽減できる、超早期段階での検査という点が、一般的な遺伝子検査と一線を画している。

さらに同クリニックでは、これも前述したが、がん治療経験者向けに再発防止や治療効果確認という、利用者のニーズに対する「解」をしっかりと示す試みを行っている点でも、類似サービスと異なっている。「全ての遺伝子検査がそうだが、ということではありませんが、遺伝子検査

によってがんリスクの有無をデータで示して、実質的にそれでおしまいというサービスもあるかもしれない。当クリニックでは、仮にがんリスクが存在した場合、利用者の方には、生活習慣などの丁寧なカウンセリングを行うだけでなく、結果次第ですが、医療施設の紹介など、可能な限り利用者の方に寄り添った医療サービスをご提供しており、不安や疑問などにも丁寧にお答えしており、安心して利用者の皆さんには利用して頂いて頂きます」（武井氏）

今後の同クリニックの展開と医療の今後について、武井氏に尋ねると次のような心強いコメントが返ってきた。

「現状では、この遺伝子検査という試みは、医療現場全体からすれば小さな取り組みの一つかもしれない。それでも、医療の最前



クリニックMIRAI・武井院長

腫瘍の存在が分かるというレベルは、すでに一人前のがんが体中にあるということ。当クリニックの遺伝子検査では、まだがんになるか、ならないかというレベルでのリスクの可能性を示唆します」（武井氏）

がんという病を、予防できる疾病として明確に位置づけ、患者もしくは患者予備軍まで射程に置き、予防的なアプローチで、新たな医療サービスを提供するという同クリニックの取り組み。言葉だけでは一般的になりつつある。オーダーメイド医療を具体的に形にしたものとしても評価できよう。

「がんの超早期リスク評価は、何より我々ががんを予防するチャンスを与えてくれます」という武井氏。同じようにがん関連の遺伝子変異を持っている方でも、生活習慣に気を配って、発症しない方もいれば、偏食や過度の喫煙など生活習慣を顧みず、遺伝子を傷つけ、がんに至る方もいる。がんは遺伝子に関わる病ですが、先天的なものよりも、後天的、つまりは生活習慣の乱れや生活環境によってそのリスクが左右される度合いの高い病です。オーダーメイド医療という新たな医療のあり方も、わが国は黎明期ですが、できることから始めていかなければ、実績が蓄えられていきません。現状では、全ての方に

理にも提供される。

がん治療後、改善しつつあるのか、再発に向かって進行しているのか、というがん治療経験者にとって最も関心のある点を「治療後の体力や免疫力の差、生活習慣など、健康体の方と比べ、体質や症状などについてよりデリケートに向き合っていく必要性の高い一人ひとりの方それぞれに見合ったアドバイスができる」という点では（遺伝子検査を基にした）オーダーメイド医療の有用性が発揮されていく領域で、今後さらに定着していく可能性が高いと見えています」（武井氏）

医療機関における遺伝子検査やそのデータを基にした医療的な指導は、すでに国内の医療機関でも実施されている。

一般的な認知度はまだまだ高いとはいえないが、例えば、乳がんや子宮がんなど、女性向けに、体質判断